

# Eureka VI

六年制通信 No. 35 平成31年3月9日(土)号

## 目標を定める

もし大学受験の科目に英語がなかったらどうなるか。中高での英語の授業はどのようなものになるだろうか。そもそも英語の授業は存在するだろうか。選択科目として残るかもしれないが、進学校の高3生で英語を取る生徒はいなくなるのではないか。昔よくこんなことを考えていました。結局大学受験のための勉強か、とね。

最近英語の4技能を学校教育が担うべきだということになってきましたから、生徒も教員も負担が増すばかりですね。本来なら週に10時間以上、いやほとんど毎日英語漬けにならないと読む、書く、話す、聴く技能をまんべんなく「学校で」伸ばすことはできないと思うのですが、別に英語の授業時間を大幅に増やすべきだとの議論は耳にしませんね。

授業を改善すれば生徒の4技能は全て着実に伸びていくはずだと考える人は、学校の授業に過度な期待をしているとしか思えないのですが、こういう発想をする人は恐らく自分は長年一所懸命に英語の単語を覚え、文法をしごかれ、英文読解でいじめられ、それでも頑張っって英語を勉強して、いい大学に入ったのだが簡単な英会話一つできないということ、学校教育のメソッドがよくないせいだと、そう思っている人ではないかと思えます。だいたい人間は自分が欠如したもの、修得に苦労したもの、あるいは修得し損ねたものに対して、こうすれば簡単に修得できますよという言葉にきわめて弱く、その反面自分が得てきたものを過小評価する癖があるようです。膨大な時間をつぎ込んでやっとテキストが正確に読めるようになっても、初歩の英会話に苦戦すると、その正確に読める能力をつまらんことだと思ってしまうのですね。

明治以来、つまり日本人が英語に出会って以降ですね、学習の目的はただ一点「正しく読む」ことだと言っていると思います。これは明治以前、漢籍に対する日本人の態度でもあります。大陸の人々と話すことではなくて、書かれている内容を正確に読むことに懸命になっていたわけです。それが語学を勉強する目的だったから、どこまで勉強するかが極めて明確でした。原書を読めるようになるころまで勉強するわけです。英語も同じです。原書を読むために、専門書を読むために勉強したのです。

現在の4技能の養成を、私は否定しませんが、修得レベルをどこまでとするのか、これはなかなか難しいと思っています。でもまあ、今のところは大学入試のレベルに頼るしかないのでしょうね、きっと。

目標設定と言えば、やや旧聞に属しますが、大谷翔平選手が高校生の時に書いた目標達成シートが有名ですね。9マスの真ん中に目標を定め、そのために必要な努力を放

射線状に書いていくというシートです。大谷選手は「野球がうまくなりたいたい」などとは書いていません。極めてはっきりとした目標を挙げています。すなわち、高校卒業時に「8球団からドラフト1位指名を受ける」ということです。そのためには、コントロール、メンタル、人間性、体づくり、キレ、スピード160km、変化球、運が必要であると書いています。このあと例えば、スピードを上げるためには下半身の強化が必要だと続くわけですが、フィジカルな部分は運動選手として当然でしょう。私は彼が「人間性」と「運」を重要と考えていることに注目したいと思います。彼はそれぞれに次の8項目を挙げています。

人間性：感性、思いやり、愛される人間、信頼される人間、礼儀、継続力、感謝、計画性

運：あいさつ、ゴミ拾い、部屋そうじ、審判さんへの態度、本を読む、応援される人間になる、プラス思考、道具を大切に使う

いかがですか。とても似ていませんか。運を味方につけるには自分の人間性を磨くことが大切だと、大谷選手は高校生の時に知っていたのですね。それに「運」の項目に「ゴミ拾い」が入っていますが、これは間接努力の最たるもので、運動選手に限らず成功した人々に共通するものです。

私は、もし目標設定を「野球がうまくなる」などと漠然としたことにしていたら「運」という項目はなかったような気がしています。極めて明確な目標を持った時、私たちは運も味方につけなければと、そう思うのではないのでしょうか。

#### 今週のおすすめ

・百田尚樹 『輝く夜』 (講談社文庫)

初めは『聖夜の贈り物』というタイトルで新書サイズのハードカバー本でした。私はそれで読んでいます。文庫になってタイトルが変わることはよくありますね。クリスマスイブに起こる五つの奇蹟の物語。『永遠の0』や『海賊と呼ばれた男』の作者とは思えないメルヘンですが、百田さんは作家になる前からこの物語を考えていたらしい。私は「ケーキ」が好きですね。末期癌の少女が聖夜に突然回復するわけですが、親指だけが動かない。美容師として囑望されていたのに。それで美容院の店長さんに勧められてケーキ屋さんに勤めるのですが、働くうちに自分も作ってみたいと、職人へ。やさしい伴侶を得て、店も順調、子や孫もでき、入院中に憧れていた主治医とも再会でき、と物語は続きます。星新一じゃないけれど、最後はおのぞみの結末。でも本当にこうであってほしいと思ってしまう物語です。最もメルヘンっぽいのは「魔法の万年筆」ですね。もし本当にサンタクロースがいるのなら、それはきっとこんな形で現れるのかもしれない、そう思われます。

ちなみに、この作家の作品はだいたい読んでいますが私の中の一番は『影法師』です。今でもたまに読み返します。この作品は単行本で出た時にはラストシーンがカットされていたのですが、文庫には収録されています。そちらでお楽しみください。

BGMは 倍賞千恵子の オホーツクの舟歌 でした…。